

## 「感謝の言葉が持つ力」

令和7年6月10日

江戸時代、大阪堺に吉兵衛という人が住んでいました。商売は繁盛していたそうですが、妻は寝たきりの病人になってしまいます。使用人が多くいたにもかかわらず、妻の下の世話は他人には任せず吉兵衛が世話をしていたそうです。忙しい仕事の合間に妻の面倒をみる吉兵衛に、周りの人が「よく飽きもせず、なさっていますね。お疲れでしょう」という言葉に対し、「何をおっしゃいます。一回一回が仕事始めで、仕事納めでございます…」と。(渡辺和子『面倒だから、しよう』より 「雑用」という「用」はない。用を雑にした時に「雑用」がうまれるそうですよ)



私は、豊崎小に来て、正門前でのあいさつや駐車場入り口に保護者の立哨が立っていない場合、または、立哨の保護者が立っていたとしても8時には終わるので8時以降立哨に立つようにしています。怠け心のある私は、(暑いし、今日は立たなくていいかな)、と思った時、吉兵衛の言葉を思い出すようにしています。ですがそれは言うものの面倒臭さがニョキッと、もたげてくるのも正直な気持ちです。しかし、そんな私を「よ～しッ」と後押ししてくれる児童がいます。4年2組の R さんです。駐車場に立っていると「ありがとうございます」「いつも、ありがとうございます」と、声をかけてくれるのです。4年生ですから誕生日を迎えたとしても10歳の子ともです。来年度には役職退職をする60歳に近い私が、Rさんの言葉に喜び「よし、頑張ろう」と、Rさんの言葉に「勇気づけ」られているのです。感謝の言葉が持つ力を感じます。



職員面談を行いました。先生方から「勇気づけ」や「クラス会議」の話が出てきました。私は嬉しく思います。「勇気づけ」や「クラス会議」の基礎になる考え方が「アドラー心理学」です。アルフレッド・アドラー。第一次世界大戦に軍医として参加しますが、戦争の悲惨さにショックを受け、育児と学校教育こそが「世界によりよい未来をもたらしてくれる」として、アドラー心理学を打ち立てました。アドラーは人生をより良く生きるために、子どもに対しては周りの大人が「自分の力で人生の課題に立ち向かう援助をしななければならない」と述べ、課題に立ち向かうには、子どもが自立し社会と調和する。そのために人々が自分の仲間だと思え、自分には能力があると感じることが必要だと「勇気づけ」を提唱しています。アドラー心理学では行動面と心理面の目標を以下のように掲げ、その

目標を達成できるように子どもを支援するそうです。アドラー心理学では行動は信念から出ていると考え

### 【アドラーが掲げる行動面の目標】

- ① 自立する ②社会と調和して暮らせる

### 【アドラーが掲げる心理面の目標】

- ① 私には能力がある ②人々は仲間である

るようで、自立し社会と調和して暮らせるという適切な行動ができるためには、それを支える信念が育っていかねばならないと考えます。その信念が育つ言葉かけ、関わり方が「勇気づけ」になります。では、どのように「勇気づけ」を行えばいいのでしょうか。アドラー心理学では、罰

したり、叱ったり、逆に、褒めることもしません。(褒めることはいいように思いますがアドラー心理学では褒賞の心理。褒められるために注目されるための行動心理が働くために推奨そうです)また、叱ったり、罰することも自分には能力がない(自己肯定感の低下)や自分の仲間ではないという信念を育てるとのことで否定します。アドラー心理学では「ほめるのと違って、すなわち、評価するのではなく、喜びを共有すること、自分の気持ちを伝えること」(辺見一郎『アドラー心理学入門』)が勇気づけになると言っています。「～してくれてありがとう」「～してくれて助かった」「～してくれて嬉しい」などの「コーチング」で言うところの「アイメッセージ」のようなものでしょう。

子ども達は先生方に認めてもらいたいと思っています。(承認欲求)子どもたちが望ましい言動をとったとき、それを見逃さず「～してくれて嬉しい」「～してくれて助かった」「～してくれてありがとう」などの言葉をかけてください。私に「ありがとうございます」と言うRさん。これが「校長先生えらいね」「校長先生立派だね」と言われていたら嬉しけれど感動というか、「あー、やってよかった」というような心が満たされることはあまりなかったかもしれません。「感謝の言葉」が持つ力を、改めてRさんに教えてもらいました。「ありがとうございます。Rさん」